

プラトン著『パイドン—魂の不死について—』（岩田靖夫訳、岩波文庫、1998年）

<概要>

紀元前399年、ソクラテスは「国家公認の神々を拝まず、青年を腐敗させる」という罪状で告発され、アテナイの牢獄で刑死した。刑死の日の早朝、別れを告げに牢獄に集まった弟子達と、ソクラテスは日没まで魂の不死について深く厳しい哲学的対話を交わした。その対話はその場に居合わせたパイドンによりエケクラテスに伝えられた。(10頁)

<内容>

一 序曲

- ・パイドン：ソクラテスは、死に際して幸福そうに見えた。(14頁)

二 死に対するソクラテスの態度

(一) ソクラテスの夢—ムーシケーをせよ—

- ソクラテスは以前には詩など作ったことはないのに、牢獄に来て以来何故詩を作るようになったのか(19頁)

→夢(神の意志の伝達)が彼に「文芸(ムーシケー)を作り、それを業とせよ」と命じてきた。彼は哲学こそ最高の文芸だと考え、それを行ってきたが、今は夢が通俗的な意味での文芸をなすようにと命じていると思っている。夢に従い、聖なる義務を果たしてから死ぬ方が安全。(20頁)

(二) 自殺禁止論—人間は神々の所有物である—

- ソ：人間にとって生きるよりは死ぬことの方がより善い。しかし、自分自身にその善いことをなす(自殺する)のは不敬虔な行為である。(23頁)
 - ・神々は人間を配慮する者であり、人間は神々の所有物(奴隷)の一つである。それゆえ、所有物が主人の意思表示なしに勝手に自分自身を殺すことは許されない。(24頁)
- 喜んで死ぬのは何故か

配慮分別ある人は自分より優れた方のもとにいつも居ようと望むのに、いったい何を望んで、本当に知恵のある人々が自分より優れた主人達から逃げ出すのか。(25・26頁)

→この世を支配する神々とは別の賢くて善い神々のもとへ、そしてこの世の人々よりはより優れた死んだ人々のもとにも行くだろうと信じている。(26・27頁)

(三) 哲学者は死を恐れない。死とは魂と肉体との分離であり、哲学者は魂そのものになること、すなわち、死ぬことの練習をしている者であるのだから

- ・哲学者の魂は肉体を最高度に侮蔑し、肉体から逃亡し、まったく自分自身にだけなろうと努力する。(33頁)
- ・ものごとの本質の最も真実な姿は、肉体を通して見ることはできない。肉体は魂を惑わし、魂が真理と知恵を獲得して、真実在に到達することを許さない。(33・34頁)

…そうであるなら、知を獲得することはいかにしても不可能であるか、可能であるとすればそれは死者にとってのみ。死んだ時にはじめて、魂は肉体から離れ、自分自身になるから。(36頁)
- ・哲学者が生涯を通して憧れ続けてきたもの(知恵)は、あの世以外のどこにもない。

→こう信じる人が死を恐れるとすれば、それはまったくの不合理なことである。(39頁)
- ・哲学者以外の者の徳…恐怖と臆病による勇敢、放縦による節制(41頁)

節制・正義・勇気…情念からのある種の浄化（カタルシス）（42頁）

(四) ケベスの反論。魂は肉体から離れると煙のように飛散消滅するのではないか（43頁）

三 靈魂不滅の証明

(一) 生成の循環的構造による証明。生から死へ、死から生へ

●死んだ人たちの魂はハデスに存在する

…魂はこの世からあの世、あの世からこの世へと移動し、死者達から生まれる、という説がある。これが真実なら、魂はハデスに存在するほかはない。（47頁）

・何か反対のものがある限りのものにおいては、その一方は反対である他方からしか生じえない。（49頁）

・すべての反対のものの対の間には、それらが二つである以上は、二つの生成がある。（48頁）

→生きているものからは死んでいるものが生じ、死んでいるものからは生きているものが生じる。（51頁）

●生成は循環的なもの。仮に直線的なものだとすると、生成がその向きを変えることはなく、最後には万物が同じ形、同じ状態となって生成することを止めてしまう（53・54頁）

(二) 想起説による証明。アイデアの認識は想起である。故に、人は誕生以前にアイデアを見ていたのだからなければならない

●われわれの学習は想起に他ならない。

・人々は上手に質問されると、どんなことについてでも、それが真実にはどうあるかということを手力ですることができる。→人々のうちに予め知識や正しい説明が内在する（55頁）

・ある人が感覚で何かをとらえた場合、その当のものを認めるばかりでなく、別のものをも思い浮かべる。（56頁）

●似ているものから生じる場合の想起…「等しさそのもの」がある

・具体的な事物(木材や石)が互いに等しいのを見て、これらから、これらとは異なる「等しさそのもの」を考えつく。…等しい事物と等しさそのものは同一ではないが、前者を見て後者の知識を考えついた。（58～60頁）

→なにかあるものを見ながら、この見たことを機縁にして、なにか別のものを考えつくならば、それが似ていようが似ていまいが、そこに必ず想起が起こったのである。（60頁）

●最初に等しい事物を見て、これらのすべては等しいそのもののように有りたいと望みながらも不足している、と気づいたときより前に、等しさそのものを予め知っていなければならない。

・等しさそのものを考えつくきっかけは、等しい事物を見たり、触れたり、何か他の感覚で感じたりすること以外にはない。

…感覚を働かせ始める以前に、われわれは等しさそのものが何であるかについての知識を予めどこかで得てしまっている。（知らないことを考えつくことはできない）

そして、われわれの感覚は、生まれてすぐに働き出すものである。

→われわれは、生まれる以前にそのようなものすべて（「等しさ」、「美そのもの」、「善そのもの」、「正義」、「敬虔」、「まさにそのもの」という刻印を押すすべてのもの）の知識を得ていたのだからなければならない。（61～63頁）

そしてその知識を生まれてすぐに失ったのなら、「学ぶこと」はもともと自分のものであった知識を再把握すること、ということになる。…これが、想起すること。（64頁）

●魂は人間の形の中に入る前にも、肉体から離れて存在し、知力を持っていた（66頁）

…「美」や「善」やすべてのそういう実在が確かに存在するのと同じ意味において、われわれの魂もわれわれが生まれる以前から存在したのでなければならない。(67頁)

(三) さらに強力な証明へのケベスの要求

●死後もなお、魂は存続するか(68頁)

- ・魂は生前にも存在する。
- ・魂が生を受けて生まれてくるのは死なないしは死の状態以外からはない。

→魂は再び生まれてこなければならない。つまり、魂は死後も存在する。(69頁)

(四) 魂とアイデアの親近性による説明

(A) 合成的なものは解体し、非合成的なものは解体しない。

肉体は合成的であるが、魂は非合成的である

●魂は人が死ぬと同時に散りぢりになってしまうのではないか(71頁)

- ・合成物…合成されたのと同じ仕方で分解。時によって有り方を変え、自己同一を保たず
 - ・非合成物…分解されない。常に自己同一を保ち、同じように有る
- …実在そのものは常に自己同一を保つが、すべての事物は自己同一を決して保たない。

また、目に見えないものは自己同一を保ち、見えるものは自己同一を保たない

→肉体は後者に、魂は前者に親縁性がある。(72～75頁)

- ・魂が自分自身だけになって考察→永遠的なものと関わりながら、恒常的な同一のあり方を保つ
- …魂のこの状態を、知恵(フロネーシス)という(76頁)
- ・自然…肉体には奴隷としての奉仕、魂には主人としての支配を命じる
- …魂は神的なものに、肉体は死すべきものに似ている

⇒肉体は解体することが相応しく、魂は解体されえないかそれに近いことが相応しい(77・78頁)

(B) われわれはできるだけ自分自身の魂を肉体の交わりから浄め、魂自身となるように努めなければならない

●魂が純粋な姿で肉体から離れた場合

- ・肉体的要素を少しも引きずっていない…魂自身へと集中する練習の成果
- 練習…正しく哲学すること、平然と死ぬことを練習すること(79頁)
- 人間的な悪から解放され、幸福になる。残りの時間を神々と共に過ごす

●魂が汚れたまま浄められずに肉体から解放される場合

- ・肉体に習熟したため、肉体的なものによってしっかりと捉えられている。
- ・肉体的なものは重荷である。そのため、目に見える場所へと引きずり降ろされる。
- ・卑しい人々の魂。彼らは、生前自分達が実践してきたような性格の中へ再び入り込む。(80～82頁)

●神々の種族の仲間に入るには

- ・哲学をした者、まったく浄らかになって立ち去る者、学を愛する者にしか許されない。
- ・哲学…解放と浄化をもたらす。(83～86頁)

(五) 間奏曲1. 白鳥の歌

- ・神の使いである白鳥が死に際して最も美しく鳴くのは、神のみもとへ立ち去ろうとしていることを喜んでいるからである。ソクラテスも同じ神に捧げられた聖なる者なので、白鳥達より暗い気持でこの世とお別れするわけではない。(90頁)

(六) シミアスの反論。魂が肉体の調和なら、肉体の消滅と同時に魂も死滅する

- 豎琴の比喻…豎琴を壊すと、死すべき合成物である豎琴や弦は依然存在するが、ハルモニア(和音、調和)は神的にして不死なるものと生まれを同じくするのに、滅びてしまう。

- 魂はハルモニア一的なもの…肉体のうちにある、相反する諸要素の調和
…肉体の調和が乱れると、魂は真っ先に滅亡せざるを得ない。(92～94 頁)

(七) ケベスの反論。魂が肉体より長命だとしても、幾度も肉体を着潰すうちに疲労し衰弱して、ついに滅亡しない、という保障はない

- 魂はすべての面で肉体をはるかに凌駕しているが、一つ一つの魂は多くの肉体を着潰していく。そして、魂の不滅を確信するのはまだ正当でない。(97 頁)

(八) 間奏曲 2。言論嫌い(ミソロギア)への戒め

- 言論嫌い人間嫌い…同じような仕方では生じる(盲信から幻滅という経験を繰り返す)
悪い言論と出くわしたために、本当に存在するものの真理や知識を奪われてしまう
…言論には何も健全なものはないかもしれない、という考えが心の中に忍び込むのを許さないようにしよう。健全であるべく努力する。(102～106 頁)

(九) シミアスへの答え。想起説と「魂は調和である」という説は両立しない。魂は肉体的な構成要素に支配されるのではなく、支配するのである

- 一方では魂が肉体の中に入り込む前にも存在していたと言いながら、他方ではその魂がまだ存在していないはずの構成要素から合成されていると言っている。…矛盾(109～110 頁)
- 調和のあり方は、その調和の作り出され方に依存している。しかし魂については、魂であることそれ自体に程度の違いはない(より多く魂であるとか、より少なく魂であるということはない)。これを「魂＝調和」という見地から言い換えると、魂が調和であることそれ自体において、より多い、あるいはより少ないといった程度の違いはない(調和の作り出され方に差がない)ということになる。
すると、この調和は、等しい調和ということになる。そうすると、魂が不調和や調和をもつ程度にも差はないはずである(悪徳＝不調和、徳＝調和という考えだと、悪徳の程度と徳の程度に差がないことになる)。
つまり、すべての動物の魂が同じ程度に善い魂ということになる。…おかしい。(111～115 頁)
- 魂が肉体的情態と反対の働き方をする例は無数にある。しかし、「魂＝調和」とすると、魂は構成要素である肉体の諸要素に逆らうことはできず、肉体を支配することはできない。(115～118 頁)

(一〇) ケベスの論点の確認

- 魂は不滅であり、不死であることが証明されなければ、死を恐れることは当然である。(120 頁)

(一一) 間奏曲 3。最終証明への準備

- ソクラテスは若い頃、自然についての研究に熱中したが、それを止めてしまった。
 - ・自然学的説明…体の成長は、肉が肉に、骨が骨にという具合で固有のものが付け加わることで起こる。(122 頁)
 - … $1 + 1 = 2$ という基本的な付加に難点がある以上、さらに複雑な生成の説明において、自然学的な説明は有効性を持ち得ない。(123 頁)

(A) アナクサゴラス(自然学)への失望

- ・理性(ヌース)が万物の原因であり、理性が万物を秩序付けている
自然の各々に原因を与え、また万物に共通の原因を与える際には、アナクサゴラスは各々のものにとって最善のものと、万物に共通の善とを、詳しく説明してくれるだろう、と期待した。
→失望: 「理性」の不使用、見当違いのものを無数に原因として持ち出して、本当の原因を語ることをおざなりにした(124～127 頁)
- ・万物は可能な限り最善であるように現在配置されている…このことを可能にした力を、彼らは求めもしなければ、その力がなにか神的な強さを持つことを考えもしない。

・善なるもの、結束するものが、本当に万物を結束し統合していることを考えもしない。(128 頁)

(B) 第二の航海—仮説演繹法 (ヒュポテシスの方法) —

●それぞれの場合に、最も強力であると判断するロゴスを前提として立てた上で、このロゴスと整合的であると思われるものを真と定め、調和しないと思われるものを真でないとする。

・前提として立てるもの…なにか美 (善、大、その他すべて) それ自体が存在するということ。
(129~130 頁)

●美そのもの以外の美しいものを美しくあらしめている原因…美そのものの臨在、あるいは共有 (分有)。美によってすべての美しいものは美しいのである(131 頁)

・10は8より2つだけ (2によって) より多いのではなく、ただ「多」を原因としているのである。

・1+1の問題…2が生ずる原因は、「2」を分有すること以外ない。

2になろうとするものは「2」を、1になろうとするものは「1」を分有する。

●真に存在するものなにかを発見しようと望む以上、前提に拘泥することなくより上位の諸前提のうちから別の前提を選び、十分なものに到達するまでこの手続きを続ける。(133~134 頁)

(一二) 靈魂不滅の最終証明—イデア論による証明—

●なにか個々の形相が存在する、そして他の事物はこれらの形相に与ることによって、その形相の名にしたがって呼ばれる。(136 頁)

●「大」そのものだけでなく、われわれのうちにある「大」もまた決して「小」を受け入れない。…自分が以前からそうであったものでありながら、同時に反対のものになることも反対のものであることもない。そういう状況になれば、立ち去るか滅びるのみである。(137~138 頁)

踏みとどまって受け入れ、今まで自分が正にそれであったものとは異なるものになることを望まない。

●反対のものから生成されることとの関係 (生成の循環的構造、三の(一))

…あの時には反対の性格を持つ事物について語っていたのであり、その事物を反対の性格自体の呼び名で呼んでいた。しかし今は、その反対の性格自体について語っている。

・それに従って名づけられる事物は、その性格が内在することにより、その呼び名を得る。

・反対の性格それ自体は、相互への生成を決して受け入れようとはしない。(139 頁)

●形相そのものは常に自分自身の名を当然のこととして要求するが、存在する限り常に形相の特徴を持つような他のものもまた、同じ形相の名を要求する

・3…自分自身の名 (3) で呼ばれると共に、奇数の名でもよばれる。

奇数は三そのものとは同じではないが、数の半分は常に奇数である。

…相互に反対ではないのに、常に反対の性格を持つものも、自分自身の内にある性格と反対の性格を受け入れない (2は3の反対ではない)

・イデア的なものがその事物を占拠すると、その事物に自身のイデアを持つことを強制するばかりでなく、自分が常に持っているある反対的な特徴 (イデア) をも持つよう強いる。…3は非偶数的。つまり3は偶数と、2は奇数と、火は冷たさと反対の性質を持つ。(141~144 頁)

●魂は、何かを占拠するとそのものに常に生をもたらす。生の反対は死であり、魂は自分が常にもたらすもの (生) とは反対のもの (死) を決して受け入れない。(145 頁)

…死を受け入れないものは不死なるものと呼ばれる。→魂は不死なるもの。

・不死なるものは永遠であるので、滅亡を受け入れることはない (魂、神、生の形相) 。

- ・死…人間のうち可死的な部分は死ぬが、不死なる部分は、死に対して場所を譲り、滅びることなく立ち去る。(147~149 頁)

⇒魂は不死であり、不滅である。われわれの魂は本当にハデスにおいて存在するであろう(151 頁)

四 神話—死後の裁きとあの世の物語—

- ・魂がハデスに携えていくもの…教養と自分で養った性格のみ(153 頁)
- ・魂はハデスで蒙るべきことを蒙った後、一定期間留まり、やがてこの世へ連れ戻される(154 頁)
- ・大地について(155~165 頁)
 - ・大地を支えるためには、宇宙そのものがあらゆる方向において一様であることと、大地そのものが均衡していることで充分。
 - ・われわれは大地のなにか小さな部分に、大地の窪みに住んでいる。それはちょうど海底深くに住む者が海水を天空と思い込むのと似ている。空気の外へ出てみれば、真の世界を見ることができる。真の大地は美しい。
- ・死者の行き先…生前の行いで決まる。(166~168 頁)
- ・肉体の快樂と決別し、魂自身の飾りで装飾した者は、自分自身の魂について上機嫌で安心していなければならない。(168 頁)

五 終曲—ソクラテスの死—

<報告者の感想>

- ・現世への執着の無さや肉体への侮蔑がこれほど徹底しているのは何故か
- ・『ソクラテスの弁明』では、死はいいものか悪いものかはっきりとは分らなかったが、『パイドン』では、死が人間にとって望ましいものにまで高められている点が印象的